

聾学校幼児児童生徒の人工内耳装用の現状と学習等の状況に関する研究(2)

企画者	鄭 仁豪（筑波大学人間系）
司会者	鄭 仁豪（筑波大学人間系）
話題提供者	長南浩人（筑波技術大学障害者高等教育支援研究センター） 原島恒夫（筑波大学人間系） 鄭 仁豪（筑波大学人間系） 田原 敬（茨城大学教育学部） 茂木成友（東北福祉大学教育学部）
指定討論者	堀之内恵司（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課）

KEY WORDS: 聾学校、難聴学級、人工内耳、幼児児童生徒

【企画趣旨】

聾学校幼児児童生徒の人工内耳装用の現状と学習等の状況に関する研究のシンポジウム (1) に引き続き、本シンポジウムにおいても、2019 年に実施した全国調査の結果に基づき、聾学校の高等部本科・高等部専攻科、聾学校の総括、通常学校の特別支援学級（難聴）ならびに通級指導教室（難聴）における人工内耳装用幼児児童生徒の言語活動および学習・生活の現状と課題について報告するとともに、今後の教育・支援の在り方について展望したい。

【話題提供者の趣旨】

1. 高等部（本科）の現状と学習状況（長南）

高等部担当教員の教員経験年数の平均が約8年であり、他の特別支援学校の経験年数もほぼ同じであったことから特別支援教育に携わった年数が多い教員であった。人工内耳装用生徒は、音への反応が良いことがうかがえたが、「聞き間違え」や「聞き逃し」の可能性が多く、聴能的な面で注意すべき点があった。また、聴覚活用や言語発達の程度に応じて、読話、手話や指文字、キューサイン等、多様な手段を利用することが必要であることが示された。高等部卒業後の希望進路では、就職希望が多かったが、重複なしは、高等教育機関への進学を希望する者も見られ、希望する進路が幅広かった。「音への気付き」に比して言語音の聞き取りや言語力、コミュニケーション面、学習面では伸び悩んでいる事例が多い。高等部段階は、特有の精神発達が見られており、心理的適応などに留意する必要があることから、今後、人工内耳装用との関連に焦点を当てた調査が必要と考える。

2. 高等部（専攻科）の現状と学習状況（原島）

高等部専攻科においては、対象者が少なく、データの偏りがある可能性はあるものの、「重複あり」は「重複なし」に比べて課題は多い可能性があった。高等部本科生徒と同様、補聴器装用生徒と比較して人工内耳装用生徒は言語やコミュニケーションにおいて、そのメリットが大きい生徒もいるが、メリットがあまりない生徒もあり、かなりバリエーションがあった。また、言語音の聞き取りについては、個人差、人工内耳手術前の言語獲得環境、人工内耳の装用時期および装用後の丁寧な言語指導が重要であると考えられた。また、特別支援学校（聴覚障害）における生活面・行動面では比較的適応が良く、特別支援学校（聴覚障害）のコミュニケーションに配慮した教育環境（手話や指文字、筆談の使用等）に適応できていることを示していると考えられた。進路は、就職希望がほとんどであり、就職後の追跡調査も必要と思われた。

3. 聾学校全体の現状と学習状況（鄭）

今回の調査では、全国の特別支援学校（聴覚障害）107 校の 695 名の教員から、1,311 名の人工内耳装用幼児児童生徒に関

する回答が得られた。回答教員の聴覚障害幼児児童生徒に対する指導歴の平均 9.2 年であり、聴覚障害教育の指導経験が比較的豊かな教員であった。求められる研修の内容も、多岐にわたっており、教員の経験年数や専門性に応じた研修会の開催が望まれる結果となった。人工内耳装用状態は右の片耳装用が一番多く、人工内耳装用開始時期は、2 歳台が一番多かった。重複障害は 7 割以上が知的障害との重複であった。学業成績では、幼児児童生徒の 5 割以上が、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べて、学業成績が低く、2 割のみが同等であることが示された。研究の結果、人工内耳装用による音や聴覚活用における肯定的な影響とともに、補聴器装用児と同様に、言語発達や指導上の問題が見られていることが示唆された。

4. 通常学校の現状と学習状況（田原・茂木）

通常学校の特別支援学校（難聴）と通級指導教室（難聴）に通う人工内耳装用児童生徒166名のデータが集められた。聴覚面、言語面、行動面ともに同年齢の健聴児童生徒と同じかやや劣る程度という回答が多かった。さらに、小学校の特別支援学級（難聴）において、言語面・学業成績が低い傾向を示す児童の割合が高いという特徴が見られた。今回は通常学級に在籍する群で一括して分析を行ったが、その中でも大きな個人差があると予想される。個々の事例にも着目しながら、苦しさがある児童生徒の特徴を抽出していく作業が必要になると思われる。その際は、小学校から中学校までの発達の視点に基づいた分析も求められる。

【指定討論者の趣旨】

今後の聾学校における教育・指導への展望（堀之内）

話題提供の内容から、特別支援学校（聴覚障害）、および特別支援学級（難聴）と通級指導教室（難聴）に在籍する人工内耳装用児童生徒の人工内耳装用の現状と学習等における効果や課題が提示された。指定討論では、文部科学行政の立場から、当事者・教員、保護者、関係者を含むニーズの変化や今後の特別支援学校（聴覚障害）の役割のなかで、人工内耳が果たす役割について、展望したい。

なお、本シンポジウム (1) と (2) に関わる調査研究は、文部科学省委託事業 令和元年～令和 2 年度「特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業（新学習指導要領に向けた実践研究）」の助成を受けた。また同調査研究は、筑波大学学校教育局倫理審査委員会の承認(附 19-3・附 20-4)を受け、実施された。

(CHUNG Inho, CHONAN Hirohito, HARASHIMA Tsuneo, TABARU Kei, MOTEGI Masatomo, HORINOUCHE Keizi)